

野生のカイコが生むシルク

2011年12月

山田浩司

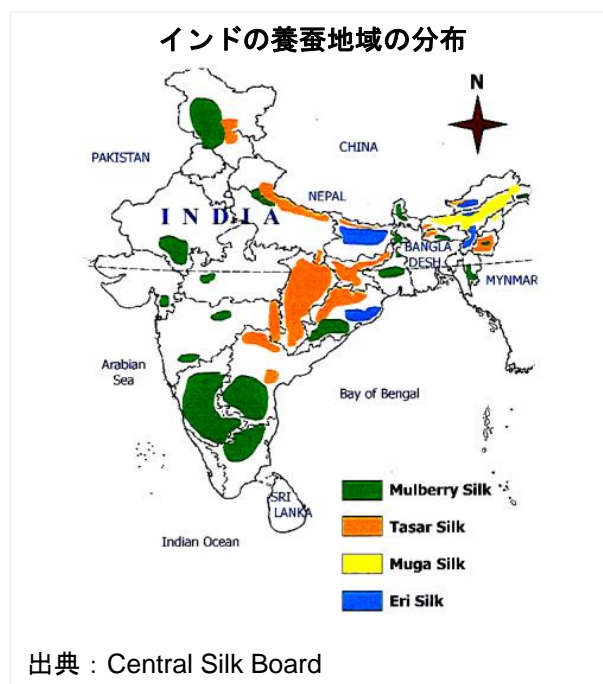
JICA が技術協力プロジェクトを実施した南インドでは、日本と同様にカイコ蛾科のカイコ (*Bombyx mori*) に桑の葉を与えて糸を作らせる養蚕が盛んに行われている。同様に「家蚕」を室内で飼育している地域としては南インドの他に北部のジャム&カシミール州やウッタラーカンド州デラドゥン周辺などがある。

一方、インド中部の山岳地帯や北東州では、自然林内の飼料樹の上でヤママユ蛾科のカイコ (野蚕) を育てる取り組みも行われている。オリッサ州やチャッティスガル州に主に生息する「タサール蚕」や、アッサム州に生息する「ムガ蚕」、ビハール州から西ベンガル州、北東州にかけて広く生息する「エリ蚕」の飼養である (右図参照)。タサール蚕は沙羅双樹やモモタマナ、アルジュナ、ムガ蚕はキンコウボク、エリ蚕はヒマ (トウゴマ) やシンジュ (ニワウルシ) の葉を食べて成長する。

野蚕の繭も織物用原糸として利用されており、独特の色合いで、家蚕糸とは異なる味わい

を持つ。ムガ蚕糸は細くて黄金色の美しいつやを持ち、インドではサリーやショールなどのフォーマルウェアとして貴重な存在になっている。対照的にタサール蚕糸やエリ蚕糸は、大衆衣料やインテリアとして広く利用されている (小林・鳥山編 1993)。

しかし、屋内でシステムチックに行われる家蚕飼育に比べ、野蚕の飼育は幾つかの理由で管理が難しいといわれている。清川 (2009) によれば、第 1 に野蚕は屋外での飼育期間が長いため、気象条件の異常や変化の影響を受けやすく、収穫が不安定になりやすい。第 2 に、野鳥やアリ、コウモリ、ネズミなどの外敵の被害にも遭いやすい。さらには、消毒や蚕病の早期発見が困難であるために、野蚕は病気にかかりやすい。そして最後に、このように収穫の安定化が難しいということは、交雑などを通じて繭の質的改善を図ることや、均質な繭を一定量生産することも難しいことを意味しており、大量生産には向かない。





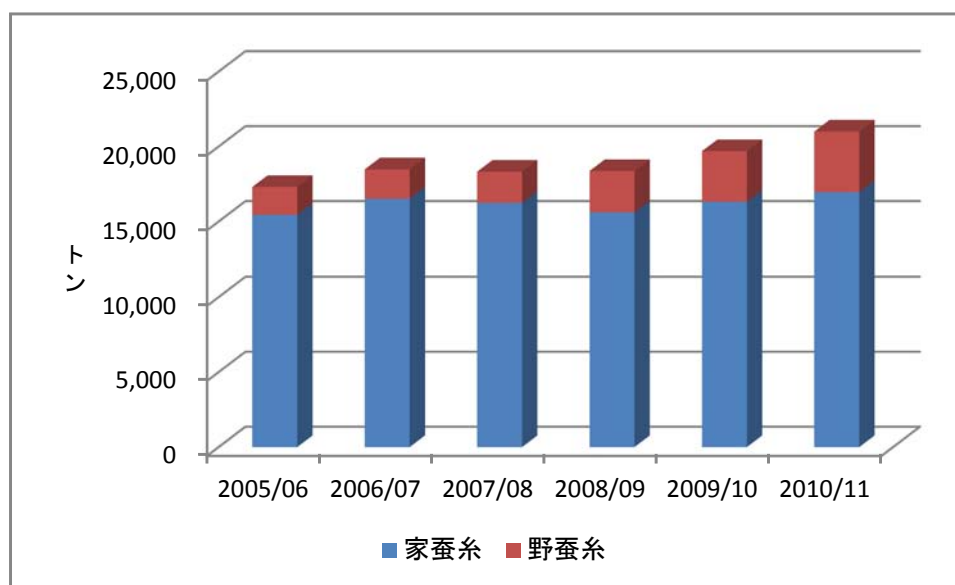
タサール蚕の幼虫／写真：山本俊雄



タサール蚕の成虫と繭／写真：山本俊雄

とはいえ、独特の味わいを持つ野蚕シルクは最終製品として根強い人気を誇り、国内生糸生産の15%を占めるまでに成長し、うち10%は輸出にも充てられている。外国の消費者の嗜好に合った商品の開発には課題が残るが、外国アパレル業者との共同商品開発が進めば、日本でもインド産野蚕シルク製品を見かける日が訪れるかもしれない。

家蚕糸と野蚕糸を合わせたインドの国内原糸生産の推移



註：2010/11 年度データは予測

出典：Central Silk Board, Government of India

【参考文献】

清川雪彦 2009、『近代製糸技術とアジア』、名古屋大学出版会

小林勝利・鳥山國士編著 1993、『シルクのはなし』、技術堂出版